「森三郎の作品を読む会」通信　第15号

2013年9月13日　発行

森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

8月の「森三郎の作品を読む会」では、
「虹の松原」（「赤い鳥」昭和7年6月号初出）
「わらび餅」（「赤い鳥」昭和7年7月号初出）
どちらも森三郎童話選集「かささぎ物語」所収
を読みました。

「虹の松原」の最初の舞台は「常陸のある村」である。その村の鈴鹿という青年が馬に乗って狩に出かけたとき、夕立にあい、松原で雨宿りをしようとする。途中で雨が上がり、大きな虹が出る。そこ「虹の松原」で一休みするうち、鈴鹿は虹の精とその娘たちを見、そのうちのひとりの娘をお嫁さんにと頼む。人間の女に生まれ変わった娘を探し当てたら許すと虹の精に言われ、娘探しの旅に出る。

もともと「常陸国風土記」には「童子の松原」という話がある。神に仕える身でありながらお互いに恋心を抱き、それを恥じて松の木になる話である。「虹の松原」という名前からは、佐賀県唐津市の唐津湾沿岸に広がる松原を想像する。鈴鹿が娘を探し出した場所は肥後の石工の家であった。唐津から肥前名護屋城に行く道を作るため、常陸の佐竹義宣の家臣も駆り出されているらしいので、遠い地名を結びつける資料となるような話があったのかもしれない。

森三郎の「かささぎ物語」は、いるか分からない女の子を探しに行く旅で、本人自身もとうとう帰ってこなかった。しかし、この「虹の松原」では十七年後に娘を探し出し、結婚し、子どももできる。けれど「言ってはならない」という掟を破ったことで、幸せな家庭が崩壊する。が、そこでまたまたどんでん返し、すべては夢であったという話。

「作品を読む会」で一年間読み続けてきて森三郎のストーリーの組み立てが少しずつ見えてきている。「赤い鳥」初掲載から順に読み進んで、まだ一年三か月分くらいだが、不遜な言い方をすると、作者の描き方の変化が分かって楽しい。

「赤い鳥」読者について②

大正七年七月発行の「赤い鳥」創刊号の読者の話を続けたい。

創刊号を読んでいた人に、日本で初のノーベル物理学賞受賞者湯川秀樹がいる。自身の子ども時代の読書体験を記した中に

「小学校の上級になって、『赤い鳥』が発行されると、私はこの雑誌の熱心な愛読者であった。

『うたを忘れたカナリヤ』よりも、今は忘れられた『行ったり来たり』などの方が、私の愛唱歌であった。時々、無意識のうちに、口ずさんでいたりした。」と書いている。（「旅人　ある物理学者の回想」湯川秀樹　一九五八年、朝日新聞社）

「行ったり来たり」は童謡のタイトルではなく、大正九年四月号の「赤い鳥」掲載の童謡「春の日」（作謡　西条八十、作曲　成田為三　と書かれている）の冒頭の言葉である。

ところで家で弟の三郎に「赤い鳥」創刊号を見せた森銑三は、当時代用教員をしていた亀城尋常高等小学校の教室でも早速子どもたちに「赤い鳥」を読んでいる。十月号の「赤い鳥」通信欄に

「『ぶく〳〵長々』のお話を受け持ちの児童に話しましたら大喝采でございました。これから、綴り方をどん〳〵お目にかけたいと思っております。（三州刈谷亀城校、森銑三）」とある。そして、同じ号に、三州刈谷亀城尋常高等小学校五年生江川直正の綴方が、翌十一月号に鬼頭かず子の「弟」と題する綴方が掲載されている。だが銑三はその年の十一月に、代用教員を辞職し雑誌記者になるために上京するので、残念ながら「綴り方をどん〳〵お目にかけ」ることはできなかった。なお、「ぶく〳〵長々」は創刊号と次号連載の鈴木三重吉「ぶく〳〵長々火の目小僧」のこと。

次回予定　平成25年10月11日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和7年8月号初出作品

「蛙」（森三郎童話選集「夜長物語」所収）

「いたちの手ぬぐい」（森三郎童話選集「かささぎ物語」所収　）